教皇様の声

Libreria Editrice Vaticana,
Città del Vaticanoの転載許可済
©1986
発行所
財団法人■精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12−6
☎(0797)31−3452

ご復活

夜が昼に席をゆずる

1　このイースター徹夜祭の間、私たちはマグダラのマリア、ヤコボの母マリアそしてサロメと共に、安息日の過ぎ去るのを待ちかまえています。イエズスの御体に香油を塗るため、イエズスの御体の納められてある墓へ行くのは彼女たちだけ。

三人の婦人たちは墓の中に安置された御体のことを考えています。イエズスの死、そしてまた、重たい石で閉ざされた墓のことを考え、「墓の入口から、だれがあの石をころばしてくれるでしょうか」(マルコ16・3)と心中憂いながら。

マグダラのマリアもヤコボの母マリアもサロメも、この安息日が新しい過ぎ越しの前夜であることをまだ知りません。婦人たちは、過ぎ越しが終わり、キリストの十字架の地には、愛する御方のなきがらの葬られた墓だけが残っていると思っていました。

私たちにとって毎年のイースター徹夜祭は、確かに起こるはずの出来事を待つことです。必ず起こるできごと、実は、すでに起こったできごとを。

それは安息日の前夜に起きました。

夜が昼に席をゆずろうとしているそのときに。

まさにその瞬間以来、過ぎ越しは偉大な夜となったのです。

2　マグダラのマリアとヤコボの母マリアとサロメは墓に着きました。そして、そこで突然、死についての予想がくつがえされます。まず第一に、婦人たちの一番の心配の種、あの大石がわきによけられてありました。墓の中に入るのを妨げるものはもはや何もありません。

それから中に入ると、イエズスの御体はみあたらず、白い服をまとった天使に出会いました。

天使は婦人たちが尋ねるのを待たずに口を開きます。「おそれることはない。私は、あなたたちが、十字架につけられたイエズスをさがしているのを知っている。しかし彼はもうここにはおいでにならない。おことばどおり復活された。」(マテオ28・5〜6)

この言葉によって、死についての展望は一変します。ナザレトのイエズスが復活されたということは、主が生きておられることを意味している。信じられないようなことですが、墓はたしかに空っぽです。それを納得させたいかのように天使は続けます。「彼がおられたその場所を見に来るがよい」(マテオ28・6)と。かくして死についての展望は、生の宣言の前に屈しました。

マグダラのマリアとヤコボの母マリアとサロメは、この事実を自分たちの口からはとても言えなかったのでしょう。それで天使がイエズス復活についての真相を宣言したのです。何年か前、神の御子がベトレヘムにお生まれになった事実を告げたのも天使であったように。

3　こうして死についての展望は一転しました。死は生に負けたのです。キリストが十字架につけられ墓に葬られた後の安息日は、真に期待の日であることが啓示されました。まさにイースターの徹夜祭がその日であります。

今から過ぎ越しは、隷属の地から退去し紅海を渡った出エジプトを記念するばかりでなく、死から生へ移ることを意味するのです。

Pascha nostrum immolatus est Christus.

あのいけにえの後の安息日は、この上なく神聖な待機の日と待機の夜となりました。まことに私たちは今日と今夜中、贖いの秘義の成就を待ちかまえています。

贖いのみ業は贖い主の復活によってなしとげられました。

4　この死から生への移行こそ、新しい秘跡のもととなるものです。

まず第一に洗礼の秘跡。

このイースター前夜に、教会は「キリスト・イエズスにおける洗礼」(ローマ6・3参照)を宣言し、この秘跡をさずけます。

はるか昔から、そして今日も同じように！　このイースター前夜に、私は、あなたがた、様々な国、あちらこちらの大陸からここに来られた洗礼志願者のみなさんに、深い感動の心で贖いの秘跡をさずけます。(…)

使徒聖パウロと共に、信仰を宣言しましょう。「私たちは、キリストの死における洗礼によって、イエズスと共に葬られた。それは御父の光栄によってキリストが死者の中からよみがえったように、私たちもまた、新しい命に歩むためである。」(ローマ6・4)

死は生にうち負かされました。

キリストの死と復活による贖いの御力が、罪を帳消しにしたのです。

「もし私たちがキリストと共に死んだのなら、また彼と共に生きることをも信じる。」(ローマ6・8)

これは、私たちすでに洗礼を受けた者ひとりひとりのことですが、イースター徹夜祭の今夜は、とりわけ愛する洗礼志願者の方々に向けられています。

もう一度使徒の言葉を繰り返しましょう。「同様にあなたたちも、自分は罪に死んだもの、イエズス・キリストにおいて神のために生きるものだと思え。」(ローマ6・11)

5　イエズス・キリストはよみがえられました。

イエズス・キリストは「死者からよみがえられて、もう死ぬことがない。彼に対して、もはや死は、何の力ももっていない。」(ローマ6・9)

イエズス・キリストは生きておられる！　そして、私たちもキリストにおいて生きるのです！

ああ、何とすばらしい夜でしょう！今宵こそ、十字架につけられた御方の権勢と力とが啓示された夜。この世の贖い主の権勢と力とが！

(一九八四・四・二十一)

聖週間

洗足はご聖体の前置き

「いいえ、決して私の足を洗わないでください。」(ヨハネ13・8)(…)

ペトロは拒否しました。しかしイエズスは使徒を納得させられます。洗足は奉仕のわざですが、同時に、キリストの救いのみわざ全体に与ることの表現でありしるしでもあります。ペトロにはまだわかっていません。「もしあなたを洗わないなら、あなたと私は何のかかわりもなくなる。」(ヨハネ13・9)

ペトロにはまだ理解できませんが、心はすでにキリストの救いのみわざに向かっています。だから「主よ、では、足ばかりでなく手も頭も」と言ったのでした。(ヨハネ13・9)

仕える

キリストは、ペトロそして他の弟子全員の足を洗われた。間もなく私は、主を記念しそしてまねるため、今日典礼を祝う十二人の司祭たちの足を洗います。イエズスが弟子たちの足を洗われたことは過ぎ越しの食事の前置きでありました。この奉仕のわざを見ると、イエズスがおいでになったのは仕えられるためではなく仕えるためであったことがふたたび明らかになります。師であり主である御方が仕えるために来られたのです。

弟子たる者はよく考え、同じようにしなければなりません。「私は模範を示した。」(ヨハネ13・15)

過ぎ越しの夕の始めに行なわれた奉仕のわざは「召し使い」の存在を示しています。それはイザヤ預言者のいう「ヤーウェのしもべ」のことです。イエズスが指摘なさりたいのは、過ぎ越しの夕がイザヤ預言者のことばの実現の始まりであるということです。どちらかと言えば、晩さんこそ、しもべの秘跡となるということでしょう。「私はあなたのはしためのの召し使いです。」(詩篇115・16)

過ぎ越しの羊

過ぎ越しの食事になると、過ぎ越しの羊を思い起こします。羊の血を扉の鴨居に塗りつけたおかげで、イスラエル人の長男は死を免れ、また、エジプト脱出への道が開かれたのでした。

同じくイエズスも過ぎ越しの羊に目をやり、エジプトの圧制からの解放に思いをはせておられます。

と同時にイエズスは、洗礼者ヨハネの声をも耳にしておられる。洗礼者こそ、「世の罪を取り除き給う神の子羊をみよ」とイエズスを指し示し、宣言したのでした。

さて、最後の晩さんの時が訪れました。ヨルダン川の辺でヨハネの口から出た言葉が実現するときが来たことをイエズスはご存じです。子羊の血が世の罪を取り除くときがやってきたのです。

かくして、最後の晩さんが頂点に達します。イエズスはまずパンを取り、それを割いて、感謝をささげ、使徒たちに与えておおせられました。「これはあなたがたのために渡される私の体である。これを私の記念として行ないなさい。」(ルカ22・19)

続いてぶどう酒のはいった杯を取り、聖パウロによれば次のようにおっしゃいました。「この杯は私の血における新しい契約である。これを飲むごとに、私の記念としてこう行なえ。」(コリント①11・25)

イザヤ預言者は苦しむしもべを子羊にたとえました。洗礼者ヨハネは、はっきりと神の子羊と言っています。

イエズスは預言者とヨハネの言葉を実現させ、ご聖体のかたちで御血による新約の永遠の契約を制定なさいました。

ご聖体においてすでに、しばらくすれば実現することが全て含まれています。「あなたたちはこのパンを食べこの杯を飲むときはいつでも、主がおいでになるときまで、その死を告げ知らせるのである。」(コリント①11・26)

このように最後の晩さんのご聖体は、起こるべきことのしるしとして起こるべきことを先取りしているのです。

ご聖体はまた、この「現実」を秘跡的にたえずあらたにされます。「主がおいでになるときまで、その死を告げ知らせるのである。」

鍵は愛

この現実、すなわち神の子羊の受難と死は、愛という面からみるのでなければ理解できません。世の贖いを説明できるのは愛のみです。キリストの御血による新しい永遠の契約を説明しうるのは愛のみなのです。

「神は(…)この世を愛された。」(ヨハネ3・16)

そしてイエズスは「この世から父のもとに移る時が来たのを知り、この世にいるご自分の人々を愛し、彼らに限りなく愛を示された。」(ヨハネ13・1)

まことにこれこそご聖体です。ご聖体は愛によってのみ説明されうるのです。

「私はあなたたちに新しい掟を与える。私があなたたちを愛したようにあなたたちも互いに愛し合え。」(ヨハネ13・34)

最後の晩さんをみつめましょう。復活の秘跡に目を向けましょう。今からのち、愛と死は、主がふたたびおいでになるまで、共に人類の歴史を歩んでゆきます。愛と死を一つにつなぎ、それをご聖体のうちに私たちのために残してくださった。それは私たちが、主を記念して、同じことをするためなのです。

(昨年の聖木曜日)

聖木曜日―聖香油のミサ

聖木曜日の典礼は聖香油のミサと称されています。ミサ中に聖香油、すなわち、聖香油と求道者の油と病者の塗油の油が祝別されるのです。

こうして教会は聖霊による「塗油」をおもい起こさせます。ナザレトのイエズス、つまり救い主は、聖霊による塗油を私たちに分配してくださいました。香油、聖油、塗油は、聖霊がお与えになる神的な力の人間への浸透について教えてくれます。充ちあふれんばかりの神の力は、キリストによって、人類に、教会に与えられました。人類全体には教会を通して与えられます。

ここでいう神的な力は、キリストの犠牲を通して、十字架上の死と結びついています。キリストの別れの言葉に耳を傾けてみましょう。「私が去らぬなら、あなたたちには弁護者が来ない。しかし去ればそれを送る。」(ヨハネ16・7)

本日はキリストの「立ち去り」の日です。キリストの立ち去りは、真理と愛の霊である弁護者の到来を意味します。ナザレトのイエズスは、立ち去るにあたり、聖霊を通して、弟子たちに永遠の塗油をしてくださいました。キリストは、聖霊の塗油によって救い主・キリストとしてこの世につかわされたのです。「私が去れば聖霊を送る。」

教会は、聖木曜日の典礼を祝って、聖霊による塗油を受け入れる準備を

説教・講話・書簡等の抄訳

します。キリストの立ち去りを機会に与えられる力への受け入れ準備をしてくれます。

救いの力

この塗油、この神的な力に与るのは神の民全体であります。『教会憲章』はこの点を次のように述べています。「洗礼を受けた者は、再生と聖霊の塗油によって、霊的な家および聖なる司祭職となるよう聖別される。それはかれらがキリスト信者のあらゆるわざを通して霊的供え物をささげ、やみからご自分の感嘆すべき光へとかれらを呼び給うた方の力を告げる者となるためである。(①ペトロ2・4～10参照)」(10)

使徒の手による按手によって司祭になった私たちが独特な方法でこの塗油、この救い主の力に与ります。司教職、そして司祭職における兄弟のみなさん、私たちは、キリストの召し使い、神の秘義の管理者です。そこで、聖香油の典礼に特別のかたちで与ります。共同の司式によって、司祭職に対する私たちの信仰を告白します。共同司式によって、キリストこそ唯お一人、新約のそして永遠の契約による永遠の司祭であられることを示します。

聖木曜日はキリストにおける司祭職誕生の日であります。人々が洗礼の秘跡において新たに生まれたように、キリストにおける司祭職の誕生は、最後の晩さんのとき、聖体の秘跡と共に制定された叙階の秘跡です。

私たちはしばしば洗礼の約束を新たにします。そこで本日、神の恩寵により私たち一人ひとりが受けた秘跡に伴う約束を新たにしましょう。

過ぎ越しの犠牲により私たちのところから立ち去られたキリストが、聖霊においてつねに私たちのもとに来てくださればと願っています。

イザヤの言葉が私たちのうちに実現しますように。「私は公正を愛する主であり、略奪と不正を憎むから、忠実に報いを与え、永遠の契約を彼らと結ぼう。彼らの子孫はもろもろの民の中で、そのすえは異国の中で名をあげ、彼らを見る者はみな、『主に祝されたすえ』だと認める。」(イザヤ61・8～9)

聖木曜日にあたり、互いにこの実現を祈り合いましょう。

聖金曜日――人の死はキリストのご死去のうつし

「父よ、彼らをおゆるしください。彼らは何をしているか知らないからです。」(ルカ23・34)

本日、聖金曜日が終わろうとする今、私たちはふたたびカルワリオの十字架の足もとに戻ってきました。すでにキリストは十字架からおろされ、過ぎ越しの日であったので大急ぎで墓に葬られましたが、十字架の苦しみのなかでキリストが仰せになった言葉に耳を傾けてみましょう。

「彼らをおゆるしください」と、自分に苦しみを与える人々の赦しを神に願う御方こそ、赦しを与える愛のあらわれではないでしょうか。

「彼らは何も知らないからです」というお言葉にはどれほどの意味がこもっているのでしょう。

「まことに私は言う。今日あなたは私と共に天国にいるであろう。」(ルカ23・43)

同じように死刑を宣言された男にこのように言いうるのは一体だれでしょうか。救いの使命を始めるにあたり、「神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じよ」(ルカ1・14～15)と宣言なさったナザレトのイエズスではありませんか。

イエズスは、救いの使命を終えるにあたり、「あなたが王位を受けて帰られるとき、私を思い出してください」(ルカ23・42)と改心した罪人の心に収穫をおみとめになりました。

イエズスの言葉は罪人の願いに対する応えだったのです。みなさん、神の国は近くなりました、神の国はみなさんの心のなかにあります。

十字架上から

十字架上の人の子からもう一言、ある意味で福音全体の要約とも言える重要な言葉が聞こえてきます。福音の核心に触れることばです。

「婦人よ、これがあなたの子だ。…これがあなたの母だ。」(ヨハネ19・26～27)

御母は子を失い、同時に子を手に入れる。実は、大勢の娘と息子を受け入れました。全員が「神の子となる」(ヨハネ1・12)力を御子からお受けになったのです。

弟子が御母を受け、人類全体が御母をうけた。私たちのために貧しくなられた御方がくださった富のすばらしさ。

「私は渇く。」(ヨハネ19・28)

そう、渇いた口は水を求め、苦しみに焼けたがごとくなった御口と舌。しかし、さらに一層の渇きをおぼえるのは主の魂です。主の渇きは全てをつつむ。最後の瞬間から、主の渇きは限界を遥かに越えています。御子はすべてをその足の下におくだろう。それは神がすべてにおいてすべてとなるためである。(①コリント15・28参照)

「私の神よ、私の神よ、なぜ私を見捨て給うのか。」(詩篇22(21)・2)

詩篇22はこの言葉で始まります。そして人の子、イザヤ預言者のヤーウェのしもべは十字架にかけられ、まさに死なんとするとき、この詩篇の言葉で祈られます。

ところで、この詩篇の言いたいことはなんでしょうか。神が神に見捨てられるとは、一体どういうことなのでしょう。御子が御父に見捨てられるなどということがありうるのでしょうか。私たちの感覚から言うと、およそありえないこと、考えられないことではないでしょうか。

御子が聖霊において御父に見捨てられたというとき、その見捨てるという行為のなかには、救いをもたらす愛が充満しています。聖霊において御父と御子が保つ一致そのものが。

「すべては成し遂げられた。」(ヨハネ19・30)　かつて、詩篇の言葉をつかって(40(39)・7、8参照)、「神よ、私はあなたのみ旨を行なうために来た」とおおせになった。

この言葉は、ゲッセマニでの苦しみの間をも通りました。「父よ、み旨ならば、この杯を私から遠ざけてください。」(ルカ22・42)

そしてこの最後のときに、同じことばがふたたび戻ってきました。贖いの犠牲の封印とも言うべきかたちで、「神よ、…」「すべては成し遂げられた」と。

「父よ、私の霊を御手にゆだねます。」(ルカ24・46)

人の子、イエズス・キリストは、第一のアダムから受け継いだ人間としての死をお受けになります。この体の死とは「霊を神にゆだねること」です。

人の死はいずれもキリストの死の写しであります。人を不死のためにおつくりになった神に霊をゆだねることなのです。

まことの人間として霊をゆだねる神の子は、その行為において、聖霊のうちに御父と一つになっていらっしゃいます。そして、聖霊は御父と御子の相互愛、永遠の息吹きなのです。

十字架の犠牲がおわりを告げるとき、死と愛が時を同じくしてあらわれます。十字架の勝利はここから生まれるのです。愛は死を通して勝利を得たのでした。

聖金曜日に私たちはふたたびカルワリオの十字架のかたわらにやってまいりました。そして十字架上からキリストがおおせになったお言葉を黙想してきました。

今ここを立ち去る私たち全員、贖いの証言であるこれらの言葉をたずさえて行きたいものです。

ああ、キリストよ、主は尊き十字架をもって世をあがない給いしにより、われら主を礼拝し、主を賛美したてまつる。アーメン。

(昨年の聖金曜日)

四旬節、受難節を迎え、エスクリバー著『十字架の道行』(定価一、〇〇〇円□送料三〇〇円)と『罪と告解』(定価七五〇円□送料二〇〇円)をお勧めします。尚、『教皇様の声』専用保存ファイルは好評につき品切れとなりました。

不変の教え

ヴルガタ訳とネオヴルガタ訳

一五八五年、教皇座にあげられたシクスト五世の四〇〇年記念にあたって。

この機会を利用して、聖書学の研究者および教授の方々、さらにシクスト五世教皇をたたえるために集うみなさん全員に、心からのあいさつを送ります。シクスト五世は「主のおことばが走り広まり、崇められるように」(テサロニケ②3・1)あらゆる努力を傾けた方でありました。

すでにタルソのパウロがそうであったように、シクスト五世教皇はみずからの司牧活動を大きな熱意をもって繰りひろげました。なかでも信仰の遺産の熱烈な守護者、救いの使信の疲れを知らぬ伝播者としての働きがきわだっていたと言えます。事実、(ペトロの教座)教皇座に登位するやいなや、聖イェロニモの聖書訳に関するトリエント公会議の指針を実行に移すため全力投球しました。教皇は聖書の専門家委員会をもうけますが、この委員会は有名なシスティン聖書完成を監督しました。この聖書はのちに、クレメンス八世の命により改訂され、以後シクストゥス・クレメンティン・ヴルガタ訳と称されています。この訳は、一九七九年Scripturarum Thesaurus(使徒憲章『聖書の宝』)が発布されるまで公式の聖書訳としての役目を果たしてきました。一九七九年以後の公式訳をネオ・ヴルガタ訳と呼んでいます。ネオ・ヴルガタ訳の出現によって、「救いのみことば」をこの上なく愛する人の不朽の業績にさらに名誉が加わったことになります。すなわち、「聖書の証言をとおして日々」(書簡133, 13参照、PL 22, 1160)語りかける神に耳を傾けた、ベトレヘムの隠遁者聖イェロニモを称えることができたのです。

特定の言語学的、批判的な面での評価を別にしても、シクスト五世教皇が示した熱意は、聖書研究を励まし、啓示された真理の忠実な解釈を保証するために、教会が払うたえまない心づかいを雄弁に物語っています。シクスト五世は雄会と神のおことばへの大きな愛に動かされ、自らの熱意をヴルガタ訳改訂というかたちに現わしたのでした。　教会

ヴルガタ訳は四世紀から今日に至るまで各時代の信者が啓示の源に接することのできるようにしてくれましたが、訳者聖イェロニモの長くて辛い道行をふりかえるという今回の会議も、教会と神のおことばへの愛を支えとして進めていただけることを期待しています。

シクスト五世教皇の使徒的事業の特徴とも言える、教会と聖書のこの密接なつながりが学者を動かして、聖書と教会の聖伝との不可分の絆により一層の光を与えることができますように。事実、一方では神のおことばが教会を集め、教会を照らし、他方では教会がその長い歴史を通して神のおことばから教会の信仰と希望、教会の生活規範を導きだしてきたのです。

聖書テキストの伝統や版の研究は、博学な解説や単に言語学的あるいは釈義的な再構成を計る仕事に限るわけにはいきません。もちろんそれらが大切であることはいなめない事実です。しかしもっと大切なこと、それはすべてが「神の啓示を受けた聖書」(ティモテオ②3・16)を包括的に理解することであります。聖書のテキストを生きる環境、つまり教会の生きる聖伝から孤立させたり、引き離したりしていては、聖書を充分に理解することなどできません。神のおことばを、教会の秘義、教会のそのときどきの自覚をうながす霊と切り離して考えることはできないのです。万一そんなことをすれば、「言葉は殺すもの」(コリント②3・6参照)、単なる古文書になってしまいます。というわけで、少し前に教皇庁聖書委員会のメンバーにお話したように、立派な聖書解釈学者は二つの点を備えていなければなりません。すなわち、「深い知識と完全な信仰」

専門家のみなさんのために学問的な準備、そして、必要な神の恩寵を謙遜に求める心を主にお願いしています。神の恩寵の助けがなければ、聖書に含まれている神の救いの計画は隠されたままで残るでしょうから。(マテオ11・25参照)　この点を強調するために聖アウグスティヌスは、聖書を教える人々に、聖書に使われている言葉をしっかりと知れ、しかし同時に深い祈りの心をもて、と言ったのです。(『キリスト教の教え』3; 36; PL 34, 89)　(六・二十四)

福音宣教と要理教育

(…)教会共同体のなかでの福音宣教の一面、つまり要理教育の大切さに触れたいと思います。パウロ六世の『福音宣教』によると、「教授法は、年齢、教養、能力などに応じて、学ぶ者の生活全体にしみ通るように、また基本的な真理が記憶、知能、心情にきざみこまれるように配慮されるべきです。」(44番)

みなさん方司教とその協力者、とくに、要理教育に携わる人々に心からお願い致します。教会の教えに忠実を保ち、機知にあふれ工夫をこらした教え方で、信徒の方々への要理教育を続けてください。

要理教育こそ、共同体それぞれにとってすこぶる大切な仕事です。ただし、あらゆる種類の説教、要理クラス、宗教教育を通して実施される教会の教職は、救いをもたらす福音の使信全体を不足なく伝えなければなりません。

聖霊がみなさん方に力を貸してくださいますように。(十一・二十二)

赦しの秘跡

『和解と悔悛』より

個別の赦免を伴う、個別の完全な(インテグラル)告白こそ、重大な罪を自覚する信者が、神および教会と和解するための唯一にして通常の形式であります。この教えが確認されたという事実からして、重大な罪は、すべて必ず、個別の告白によって、罪に伴う事情と共に、告白しなければならないことが、明らかになるわけです。(…)

例外的に第三形式を用いることができますが、その結果、第一の形式を軽視するようなことがあってはなりません。ましてや、通常の形式を放棄することなど認められないばかりか、第三形式が他の二つの形式のかわりになると考えるわけにはいかないのです。

役に立つ良き聴罪司祭であるために、司祭はこの秘跡に内在する恩寵と聖性の源に助けを求めるべきです。私たち司祭が自らの経験に基づいて深く良い準備をしてひんぱんに告解の秘跡にあずかれば与るほど、聴罪司祭としての聖務を一層効果的に果たすことができ、告解する信者に効果を保証できるという事実です。(…)

この使徒勧告を機会に、世界中の司祭、とくに司教職における兄弟たち、主任司祭の方々に切にお願いします。どうか、信者のみなさんがこの秘跡を思い切り活用できるよう鋭意ご尽力ください。

(くわしくは1986年2月号を。)

『教皇様の声』　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙　■毎月　十日発行　■定価　一部七十円送料四十円
■一年予約八〇〇円送料五〇〇円　■二十部以上の一括購入なら送料不要
郵便振替　神戸　3-72393